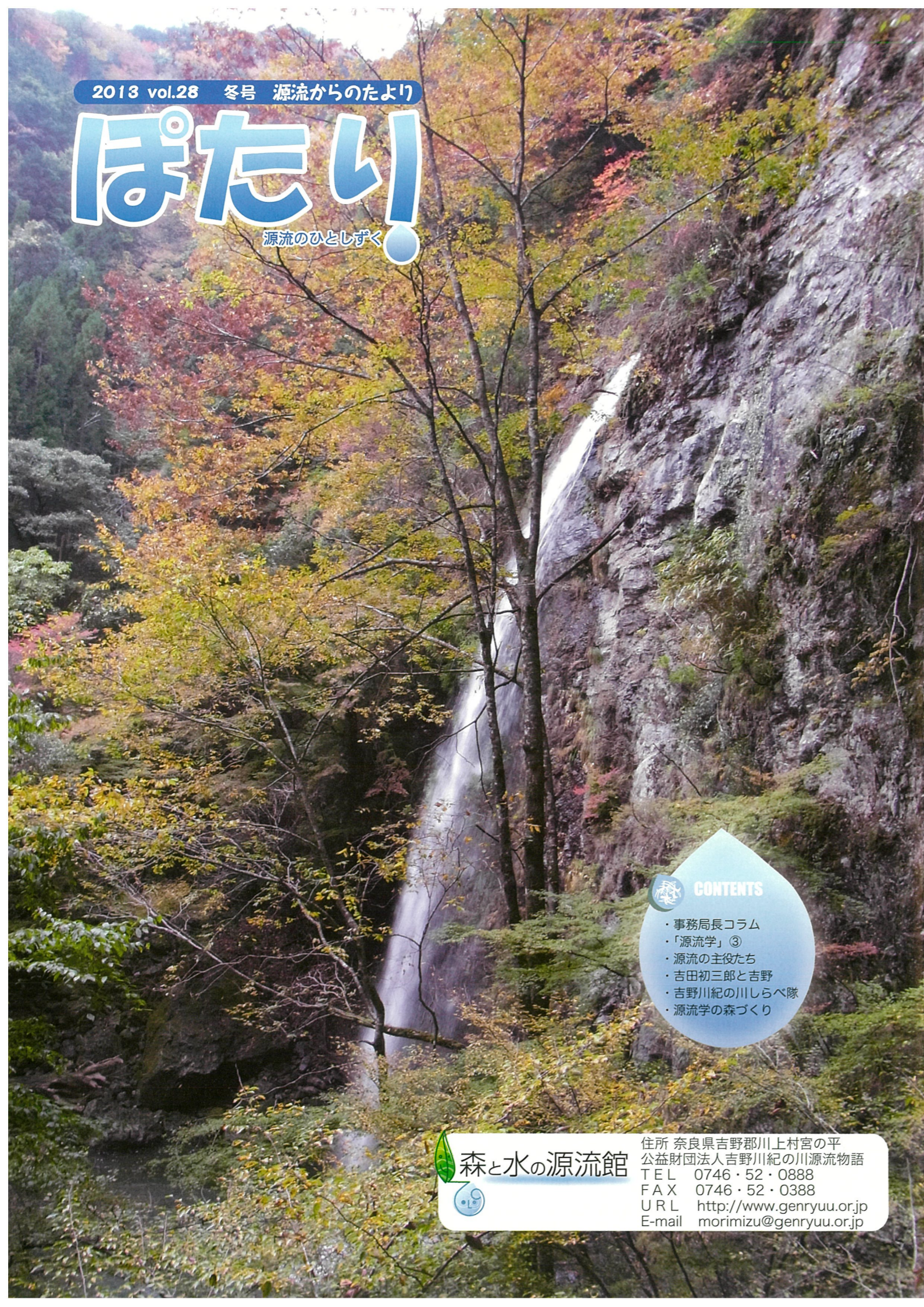


2013 vol.28 冬号 源流からのたより

# ぽたい!

源流のひとしづく



**CONTENTS**

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」③
- ・源流の主役たち
- ・吉田初三郎と吉野
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・源流学の森づくり

**森と水の源流館**

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平  
 公益財団法人吉野川紀の川源流物語  
 TEL 0746・52・0888  
 FAX 0746・52・0388  
 URL <http://www.genryuu.or.jp>  
 E-mail [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)

後日、変形菌ではなく、クサカゲロウの卵かもしれないことがわかりました。さらに、シカのフンの観察と、脱線の続々観察を楽しみました。

観察後、蜻蛉の滝を見に行きました。しかし、今回の参加者は滝には目もくれず、今度はアリジゴク（ウスバカゲロウの幼虫）の観察へ。上手に掘り出したアリジゴクをルーペで見て、毛深いこと、顎の付け根に眼があること、後ろ向きに進むことなどを観察しました。また、瑠璃色に輝くオオセンチコガネの鞘翅（固い翅）をひろったので、本種の翅の色の地域変異や、トイレを意味する雪隠（せきごん）がなまったといわれる「センチ」という名前の由来について説明しました。

滝から広場に戻って、本格的にトンボの観察へ。アキアカネを捕獲し、胸部の模様で種類を見分けること、オスの腹部の特徴を説明し、ルーペで胸部が毛深いこと、複眼が大きいこと、脚にスネ毛が多いことを観察しました。スネ毛の役割についても学びました。アキアカネ観察中にミルンヤンマを発見し、捕獲したものの頭部が取れてしまい、残念なことに。しかし、頭が取れてから27時間以上も生きていた話から、子どもたちはミルンヤンマで実験をはじめていました。駐車場に戻り、アキアカネの採卵を行う。初めて見るトンボの卵、産卵シーンにみなさん興味津々でした。最初に配った資料にトンボの模様を描いてもらおうと、

小雨の中、林道を塞ぐ大きな石を割る人と老朽化した梯子の付け替えに使う木材を運ぶ人の二手に分かれて作業しまし

6月30日(日)

**源流学の森づくり**



プロの道具と技で高い枝の上のトンボも獲りました 胸の脈の先端がとがるのがアキアカネのわかりやすい特徴です

【出現種】  
 カマキリ目：ハラビロカマキリ・ヒメカマキリ・コカマキリ/バッタ目：ヒシバッタ sp.・ツツシセコオロギ sp.・モリオカメコオロギ・エンマコオロギ・ツユムシ・セスジツユムシ・クビキリギス・カネタタキ・ヤマトフキバッタ/チョウ目：ホシヒメホウジャク・セスジスズメ・アサギマダラ・キタキチョウ/トンボ目：アキアカネ・ミルンヤンマ/コウチュウ目：オオセンチコガネ・オオクロナガオサマシ・モリヒラタゴミミシ sp./アミメカゲロウ目：ウスバカゲロウ sp.

翅脈、胸部の模様を細かく描く子どもがいて、視点、先入観の無い絵の描き方に改めて感心させられました。

た。機械や自動車が使えれば楽ちんなのですが、そうも行かず。雨の滴か、汗なのか分からないものが額から流れて、まるで苦行のようです。しかし、実際に石の目をみて少しずつ割ったり、木材にトチカンを打ってロープで引つ張ったり、体験からしか学ぶことはできません。残念ながら、どちらの作業も完了できないまま、この日は引き返しました。

8月18日(日)

他の森づくりを見学して今後役に立てようと、橿原市昆虫館の虫いっばいの里山づくりを訪ねました。ボランティアの方々が、間伐した木や刈り取った草を再利用して虫が卵を産んだり、餌にしたり、冬を越えたりするために適切な場所を作るとともに、来場者が安全に楽しく自然観察できるように整備・保全しています。月2回の活動には、登録しているボランティアの約半数が参加するそうで、昆虫の研究や自然に携わってきたメンバーを中心に職員らと意見を出し合いながら進めているそうです。同じく森づくりに取り組み仲間とつながりを持つことは良い刺激になります。比べるものではありませんが、負けないように、源流学の森を再生できるように、そして、あらためて源流の森の素晴らしい自然を心に描いたのではないのでしょうか。さまざまな思いを胸に、今後も源流学の森づくりは続きます。

**源流人募集**

**源流人とは** かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

**源流人会とは** 美しい、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

**ともし源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください**

年会費  
 個人 2,000円  
 家族 3,000円  
 学生 1,000円  
 団体 10,000円

郵便振替 00940-1-331163

**水源地の森守募金**  
 もりもり  
 にご協力ください

ありがとうございました。  
 平成24年度、378,937円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべて、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願い致します。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

【表紙の写真：紅葉したケヤキ越しに見る明神滝】

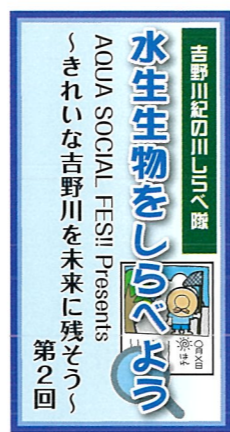
# 吉野川紀の川しらべ隊



今年にはトヨタ自動車様のサポートで、多くのみなさんとしらべることができました。

今年の西日本の夏平均気温は、1946年以降で第1位の高温であったそうです。川上村でも夕立ちが少ない暑い夏だったように感じます。そんな夏から秋への出来事を報告します。

毎年恒例となった谷幸三先生による水生生物の観察会を8月3日に実施しました。当日午前と午後の2回に分けて、94人の参加者が集まりました。



## 調査結果

- I. きれいな水でないと思えない種 (12種)
  - カジカガエル (両生類)・サワガニ (甲殻類)・モンキマメゲンゴロウ・オナガミズスマシ・ヘビトンボ (幼虫)・ニンギョウトビケラ (幼虫)・ミズ(チ) (幼虫)・ヒゲナガカワトビケラ (幼虫)・フタスジモンカゲロウ (幼虫)・イノノツヤマトビケラ (幼虫)・ミルヤンマ (幼虫)・ヒメオオヤマカワグサ (幼虫)
- II. 少し汚れた水でもすめる種 (12種)
  - ツチガエル (両生類)・ニホンイモリ (両生類)・カワウソノボリ (魚類)・タカハヤ (魚類)・カワムツ (魚類)・カワニナ (貝類)・アメンボ・コヤマトンボ (幼虫)・ダビドサナエ (幼虫)・コオニヤンマ (幼虫)・ハグロトンボ (幼虫)・ヤマトクロスジヘビトンボ (幼虫)
- III. 汚れた水でもすめる種 (1種)
  - ピロドイシビル
- IV. 大変汚れた水でもすめる種 (1種)
  - セシジユスリカ

今年、異常な渇水のため、川があちこちで干上がってしまい、音無川も例年無いほど水が少ない年でした。そのため、水温も昨年の22℃を大きく上回る26.5℃、水生生物の数も少なめでした。去年まで見られなかった「大変汚れた水でもすめる種」のセシジユスリカが見られたのは今年が初めてでした。多くの参加者のみなさんが丁寧に探してくれのおかげで、種類にはたくさんのお水生生物を見ることができました。今年のお水生生物の影響がどのようになるのか、経年での変化を今後まとめていく必要があると感じました。



虫の見分け方や生態について説明する古山先生



アブラゼミ



交尾をするヤマトシジミ

観察された虫リスト  
キリギリス・マダラバッタ (♂♀)・ショウリウヨバッタ・コカマキリ・クビキリギス (幼虫)・ツツレサセコオロギ・オンプバッタ sp.・ツユムシ (幼虫)・ササキリ・ムシヒキアブ・スジコガネ sp. (幼虫)・アブラゼミ・セミの抜け殻 (ヒグラシ・アブラゼミ)・オオセンチコガネ・ヤマトフキバッタ・オニヤンマ・アカガネサルハムシ・ナナフシモドキ・エンマコオロギ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・アリジゴク・オオコキブリ・エダナナフシ・ウスバキトンボ



8月4日に蜻蛉の滝 (川上村西河) 周辺で、虫さがし。参加者は40人と大盛況でした。今回は、とにかく虫を捕って、虫に親しもうという目的でしたが、当日は曇りで、何度も雨が降りそうな感じになる不安定な天候。そのため、飛んでいる虫があまり見られませんでした。しかし、講師の古山先生 (和歌山大学) は、

9月29日、蜻蛉の滝 (川上村西河) 周辺で、トンボを中心とした秋の昆虫の観察を実施しました。参加者は6名と少なめでしたが、みなさんとても熱心で、充実した会となりました。最初にトンボの調べ方やルーベの使い方など基本的な観察方法を学んだ後、危険生物の説明を行いました。あらかじめ用意していたスズメバチの死体をさわらせていたりして、秋の代表的な危険生物であるスズメバチの生態などを学習してもらいました。



一通りの説明の後、トンボの観察へ。早速、シダレザクラの先にアカアカネが止まっているのを発見するも、講師自ら獲り逃し、さみしい思いに……。ところが、参加者がカジカガエルを発見したので、捕獲して、カエルの観察へ脱線。その後、サクラの樹幹に着生しているカラフトキンモウゴケの上に変形菌のようなものを発見し、参加者一同、ルーベで熱心に観察。



太田国土交通大臣 (左) と財団森協理事 (右)

本財団が水資源行政の推進に関し、特に顕著な功績のあった1個人、9団体に選ばれました。これは、「森と水の源流館」と、手つかずの原生林を拠点とし、

流域平野部に向けた交流型の事業展開による、源流域の役割と河川環境に関する啓発活動の実績が評価されたものです。8月1日 (木) 国土交通省での「水の週間関連表彰式」において、太田昭宏国土交通大臣から表彰状をいただきました。



源流まつり (旧 吉野川紀の川ふれあいデー)



出展ブースをいっばいに連らねた参加団体

# 暑かった夏。

財団の動き

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局 尾上 忠大

素直に感じました。そして源流まつりでは、多くのみなさまに出展や参加をいただいたことに感謝をいたします。馴染みとなった設立当初から支えていただく団体に加え、毎年新しいお顔が増えることもうれしく思います。

季節は短い秋を経てすっかり冬となりますが、熱き心をもって取り組んでまいります。よろしく申し上げます。

その十五

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

よしだ はつさぶろう

吉田初三郎と吉野

吉田初三郎（1884～1955年）は、大正時代から昭和初期にかけて活躍し、「大正広重」とも称された商業画家です。

当初洋画家を志していた初三郎は、26号で紹介した鹿子木孟郎（1874～1941年）の関西美術院に学んでいましたが、孟郎に勧められ商業美術の道に入ります。才能を開花させた初三郎は、鳥瞰図や鉄道の記念切符、絵葉書などに優れた作品を残しました。特にデフォルメが利いた遊び心あふれる鳥瞰図は「初三郎式」と称され、現在でも高い人気を保っています。

この鳥瞰図「大峯山大台ヶ原吉野群山大図絵」は、大阪電気軌道（近鉄の前身）が発行したもので、巻末には昭和6年（1931年）4月の日付が載っていますが、11月以降に一部加筆修正された可能性があります。

この鳥瞰図が発行された昭和6年は、奈良県・三重県・和歌山県が三県合同の「近畿国立公園期成同盟会」を結成し、吉野熊野国立公園の指定運動を盛り上げ

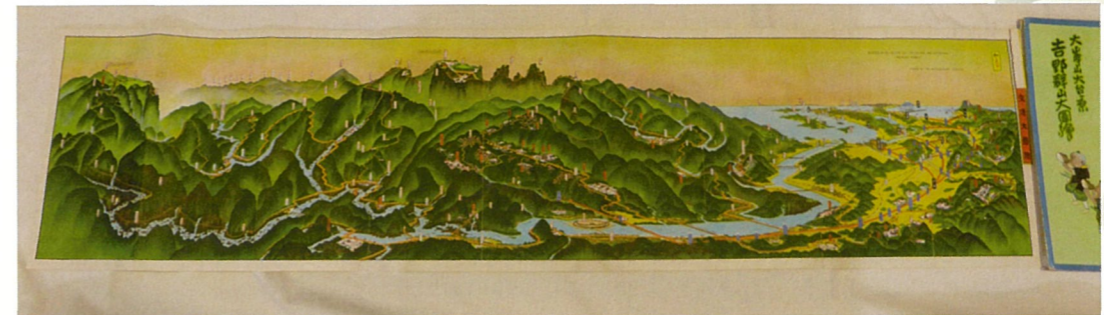


図1 「大峯山大台ヶ原吉野群山大図絵」全体

ていた年です。翌7年（1932年）には初三郎の師である鹿子木孟郎が大坂電気軌道の委嘱を受け、候補地の水彩画製作を行っています。この作品も孟郎の水彩画と共に、指定運動を盛り上げるツールとして描かれたようです。

吉田初三郎が活躍した大正時代から昭和初期にかけて、全国各地で鳥瞰図や旅行案内、観光絵葉書が盛んに発行されました。その中で初三郎が「大正広重」と称されるほどの人気を集めたのは、その遊び心あふれる画風だけでなく、詳細な調査と現地取材に基づいて描かれたものだったからです。この作品を見ると、場所の取り違えではないかと思われる箇所や、地名・名所に若干の省略が見られるものの、吉野発電所（吉野町樋井）や柴橋（吉野町宮滝、2代目の柴橋）の形状、妹背山（川上村柏木）の絶壁、大峰山への道筋にあった茶屋や石段などはかなり正確に描かれています。昭和6年11月以降に加筆された可能性のあるものも、同年11月19日に竣工した吉野神宮の齋館や絵馬殿が描きこまれているからです。



図2 吉野神宮付近の拡大

初三郎の鳥瞰図は知られているだけで1600点以上（一説によると3000点以上）存在するといわれています。もし家の物置や古書店などで初三郎の鳥瞰図を見つけたら、自分の知っている地域や建物が描かれていないか手に取って眺めてみるのも面白いかもしれません。

参考文献… 『パノラマ地図セレクション―吉田初三郎の世界―』堺市博物館 2010年



図3 表紙

あ

と少しで今年も終わる。こないだ正月を終えたばかりと思っただけ、本当に1年は、早いもんなあ。お正月にはどの地域でも氏神さんにお参りする習慣があったが、年々、お参りする人が減ってきているように思う。それは都会だけでなく、川上もおなじみで、お参りする人がだんだん減ってきている。初詣は行くのに、地元の氏神さんにはお参りに行かない人が増えていくと思う。そのうえ門松や注連縄、車のお飾りをする人も、だんだん減ってきた。日本人の神に対する念が、時代の変化とともに、変わってきたんかもしれない。

その氏神さんとおなじみに、山の暮らしの中でお祀りされている山の神さんの話をしようと思う。



吉野川源流-源流水源地の森を守る三之公の山の神

山

の神にはいろんなわれがあるが、吉野ではイワナガ姫を神さんとしてお祀りしている。イワナガ姫は、オオヤマツミノカミの娘で、コノハナサクヤ姫の姉である。『古事記』にも書かれてあるが、ニニギノミコトが日向の岬で、美しいコノハナサクヤ姫を見初め、結婚を申し込んだところ、父に相談したいと返事をし、父親はイワナガ姫とともに嫁がせたそう。

その後、醜い顔をしたイワナガ姫は、実家に帰され、怒った父親は「わたしが娘二人を差し上げたのは、イワナガ姫は、その名の通り、体力、気力ともに抜群に強く、天孫が岩のように永遠のものになるようにと願ったこと。コノハナサクヤ姫を差し上げたのは、天孫が花のように繁栄するようにと願ったこと。コノハナサクヤ姫を留め、イワナガ姫を返したことは、天御子といえども花が散るようになり、もろくはかないものとなりましょう」と言い送ったとある。



③山の神-1

子どもたちに伝えたい「源流学」

達ちゃん語る

吉

野の人たちは、そのイワナガ姫を山の神として大切に祀ってきた。山に入る日は、山始めの日といって、安全を祈願して山の神をまつ。それは伐採の時だけでなく、新しい山に入る時必ず行う「山入りの行事」として、若い衆も必ずしている。山の神は、山で働いている人だけの神さんだけではない。川上で暮らしている人にもかわりのある神さんやと思う。山行ききさんはもちろん、山行ききで商売が成り立ってきた人たちや、恩恵を受けて来た人たちにあって大切な神さんやとわしは思う。氏神さんの横には山の神



山の神のお祭り

さんが祀ってあって、昔は盛大にごくまき（もちまき）もあつたけど、いまは山林労働者ぐらしか関わっていない。林業は関係ないと思ってる人が多いのかもしれない。さみしいことや。川上でも2つか3つぐらいいしかなんと違うかな。その1つは水源地の森にある。平成14年に、水源地の森の整備が始まったとき、わしや関係者でつづいた。あれから11年、年に3回のお祀りも一度も欠かしたことがない。その話は、次回にでも。



ごくまきの様子（写真は昨年の開館10周年でのもの）

\*連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。



## 川上村のヘビについて

井手 泉 (源流人会員)

森と水の源流館では、7月13日から9月8日までヘビをテーマにした企画展「巳」を開催しました。

前回に引き続き、井手泉さんに川上村のヘビについて紹介していただきます。



1. ヤマカガシ幼蛇



2. ヤマカガシ成体



3. ヤマカガシの頸腺  
(この部分の皮下に毒腺がある)

### (3) ヤマカガシ (ナミヘビ科)

日本本土のほか、国外にも分布するヘビで各地で最もよく見かけるヘビの代表格です。成体の全長は60-120cmで、まれに150cmくらいのももいます。ちなみに、川上村の明神谷の山林で200cmほどの巨大なヤマカガシがゆっくりと移動しているのを見たという3人の目撃証言がありますので、多少の錯覚があったとしても、常識を越える巨体がいる可能性はあります。本種の食性はカエルが主食で魚も食べ、他のヘビが敬遠するヒキガエルの仲間も好んで食べます。川上村の源流域はナガレヒキガエルが多く、本種は獲物に恵まれているため、都市周辺では見られない大型の個体が多いです。

体の色は一般にオリーブ色の地に不規則に並ぶ黒斑と赤斑が入りまじり、頸のあたりに黄色の輪状の斑紋があります。これらの斑紋は幼い個体ほど鮮明で、加齢に伴ってぼやけて、目立たなくなります。また、個体変異の幅が大きいので様々な体色のものがあります。

本種はとても温和な性格で、逃げ足の早いヘビですが、逃げ場を失うと急に前半身を持ち上げ、頸部から胸部をコブラのように広げて威嚇し、さらに近づいたりいじめたりすると咬みつきます。本種の両顎の奥の方にある大きな歯で深く咬まれると、上唇の後部にある毒腺から毒液が分泌され、奥歯を伝って注入されるため、最悪の場合は命を落とすこともあるので、マムシよりもその点では危険です。また、首の背面には頸腺という毒腺があり、その皮膚が破れるとその毒液がしみ出したり噴出したりします。それが眼に入ると角膜炎になり、失明することもあります。ヤマカガシの首を棒切れなどで抑えたり叩いたりすると、そんなパチが当たりますから、山道などで出合ったらいじめたりせずに、優しくあいさつして、彼らが立ち去るのを笑顔で見送ってください。

### (4) ニホンマムシ (クサリヘビ科)

ニホンマムシ (マムシ) は昔から毒ヘビとしてあまりにも有名で、日本全土のヘビの中で唯一の卵胎生 (卵を胎内で孵化させて子を産む繁殖形態) です。全長は40-65cm。太くて短い体つきと、扁平で三角の頭、くびれた首、短い尾、そして背面の左右に少しずれて並ぶ丸い銭形の斑紋、これらがニホンマムシの特徴です。背面の色には変異がありますが、多くは褐色または赤褐色です。あまり活発に動かず、丸くトグロを巻いてじっと静かにしているのも特徴です。そして動く時は、他のヘビが首を地面から上げて、頭を水平に保って進むのとは異なり、マムシの方は首を地面につけたままで頭を地面から30°位の角度で上げて、進んだり止まったりします。この頭の保ち方の特徴を見れば、一見ただけでマムシであることがわかります。

マムシの食性はカエル、トカゲ、他種の小型のヘビ、ネズミなどの小型ほ乳類で、夕暮れから宵の口ごろに最もよく活動します。マムシの眼と鼻の間にあるくぼみには、ピットというレーダーがあるため、暗闇でもほ乳類の熱を感知して捕らえることができます。そして、獲物を捕らえるためのもう一つの武器は、毒牙です。これを相手に打ち込み、毒によって弱のを待って、ゆっくりと飲み込みます。マムシは、性質がおとなしく、動きが遅いので、一定の距離さえ保てれば、咬まれる心配はありません。しかし、マムシは保護色でしかも静止していることが多いため、それに気づかず接近しすぎて

咬まれることが多いです。その点は十分な用心が必要です。

そして、万が一マムシに咬まれた時は、慌てたり、興奮したりせずに、なるべく平静を保ちながら毒を吸い出し (このとき、直接口を付けて吸い出さずに、ポイズンリムーバーなど専用の器具で行うこと)、傷口の根元をヒモなどでしばって止血し、なるべく早く病院で手当を受けることが重要です。そうすれば、完全快復しますが、それでも苦痛や損害は大きいので、人間の多い場所や日常の生活圏内にいるマムシを殺すのは止むを得ません。しかし、殺したら、食用や薬用としてなるべく活用していただきたいです。なお、殺した後、すぐに頭の近くに手をふれると、神経だけはまだ生きていて、反射的に咬みつくことがあるので、しばらくの間は要注意です。また、マムシ酒にするには、殺さずに生け捕りにして、胃腸の内容物が十分消化され、すべて排出されるまで絶食させた後、焼酎6割にアルコール4割位を入れて、マムシを浸ければOKです。殺したものを、そのまま焼酎に浸けるだけでは腐って飲めませんので、ご注意ください。

### 2. 自然の象徴・一筋縄ではいかないヘビ

4種の紹介に続いて、筆者のヘビへの思いを少し述べさせていただきます。

ヘビという動物は、人類発祥の太古から世界中の神話、伝説や民間信仰を通して、あるときは癒しや再生、豊穰、あるいは神聖なものと結びつき、あるときは災いや死、罪、あるいは邪悪なものと結びついてさまざまに描かれてきました。このように善・悪双方のイメージでこれほど深く人類の心情に根付いている動物は、ヘビ以外にはありません。この事実こそが、ヘビがまったくユニークで極めて複雑なキャラクターの持ち主である証であり、“自然や生命の象徴”とされてきたゆえんです。それは、人間の想定外のことを起こす大自然の動きやその計り知れない威力と、一方、人間の予想をはるかに超えることを平然とやってのけるヘビの不思議な能力とが似通っているからかもしれません。

そもそもヘビは、その姿形からして、特異な脊椎動物であり、あの手足のない長い体つきと見開いたままぶたを閉じることのない目つきを見ているだけでも、何か得体の知れない深いインパクトを受けます。しかも、その一本の棒のようなシンプルな身体から繰り出されるしなやかで流れるような蛇行や、矢のような素早い動き、そしてあるものは自分の身体を獲物に巻き付けて絞め殺し、自分の顔の何倍もある大きな相手を丸飲みにし、またあるものは暗闇の中でも獲物の位置を正確に知り、毒牙で致命傷を与えて飲むなど、その端尻すべからざる多彩な異能、そしてさらには、人間に決して媚びない野生の気品、人の管理になじまない気むずかしさや繊細さなど、ヘビたちの特質をよく知れば知るほど、その意外性の神秘に圧倒され、また魅了されるものです。だからこそ、太古以来、人間の思いや感情の象徴的表現の方法としてヘビがあまねく用いられてきたのだと思います。まさしく、ヘビは大自然と生命の象徴です。

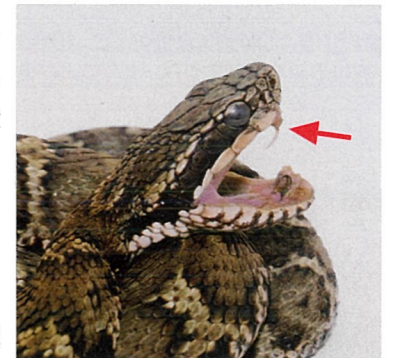
### 3. 終わりに

ヘビについて述べたいことはいっぱいありますが、その記述をいくら読んでいただいても、また詳しい図鑑を何回見ていただいても、決してヘビを本当に知ることはなりません。ヘビ自体の本質を本当に理解するためには、何はともあれ自然の中に分け入り、実物のヘビに出会う以外にはありません。その出会いの中で、自分の眼と五感のすべてを傾けて、一切の先入観や言葉をシャットアウトして、ヘビそのものを、直接に観察してみてください。そして、彼らの全身から発信しているその時々メッセージを全身全霊で虚心坦懐に感受し、ヘビという生き物の不思議さに驚き、その神秘に感動し、ヘビが古い皮を脱ぐようにリフレッシュしてください。

前回と今回の2回にわたって、川上村のヘビ8種のうち4種を紹介しました。「巳」のシリーズはこれをもって終わります。



4. ニホンマムシ



5. ニホンマムシの毒牙



6. マムシ酒